

# 「やきものまつり」とまちづくり

山崎 崇

東海三県には瀬戸・常滑・美濃・萬古という四つのやきもの産地がある。各産地では数多くの「やきものまつり」が週末を中心に開催されている。残念ながらまだ訪れたことのないものもあるが、まちやまちづくりと「やきものまつり」の関係を考えてみたい。

## せともの祭@瀬戸

磁祖民吉を祀る窯神社の祭礼を原点到、一九一六年に始まったお祭りである。世界恐慌の最中であつた一九三二年、不況に苦しむやきもの問屋が残品整理を目的に廉売市を始め、「せともの祭」の名で全国に広く知られるようになる。また、二日間のうち必ず一日は雨が降ると言われており、雨祭りとも呼ばれている。



せともの祭@瀬戸 (2004.9.12)  
瀬戸川沿いに並ぶ露店は多くの人でにぎわう。写真奥は建設中のパルティせと。



「一木橋あっちべたこっちべたフェスタ」@常滑 (2004.10.31)  
本部中央会場での音楽イベントの様子。



みずなみ陶土フェスタ@美濃 (2004.8.7)  
上)通りにはオブジェ製作現場のテントが並ぶ。  
下)24時間で仕上げるにはかなり大変な大きさ。



酔月窯秋祭り@萬古 (2004.11.23)  
奥に見えるのがすわ公園交流館。この公園の地下にはパズルパーキングという不思議な駐車場があります。

一番の特徴は、瀬戸川沿いに並べられた三百近くの露店やそこで売られているやきもの多さ以上に、まつりに訪れる人の多さである。二日間で五十万人以上の人が全国各地から訪れると言われ、ま

ちのPRにも貢献している。昨年是不況の影響で廉売市の売り上げが落ちたとはいうものの、まちの経済へ大きな貢献があることには変わりはない。その集客力の多さも理由のひとつであると思うが、瀬戸川での廉売市の開催に対し警察から会場変更を求められている。検討の結果どのように開催方法が変更されるのか今後注目したい。

やきもの散歩道フェスティバル@常滑  
やきもの散歩道は、やきもの工場が残る小高い丘の上にある狭く起伏のある迷路のような路地で、土管坂に代表されるようにやきものまち独自の風景が残る場所である。このやきもの散歩道を大勢

の人々に楽しんでもらおうと、一九八七年に青年会議所が「やきもの散歩道フェスティバル」を企画し、毎年継続していた。(昨年は、「一木橋あっちべたこっちべたフェスタ」という新たな産業観光まつりの立ち上げもあり、やきもの散歩道フェスティバルは中断された。)  
観光客の増加だけを目指してフェスティバルを開催するのではなく、商売を目的としない市民を巻き込んだまちづくり活動を展開しているのが特徴である。散歩道沿いの店主と住民からなる「散歩道の会」やまちづくり協定や散歩道の心得を作成した「タウンキーピングの会」、ボランティアガイドを担う「案内人の会」などの団体が役割を分担し、緩やかに観光のまちへと発展している。

修され、週末には多くのイベントが開かれている。交流館での初の開催にも関わらず、お揃い衣装を着た運営スタッフや陶芸教室の作品に対し賞を贈った協力団体・企業など、まつりを支える仕組みが上手く構築されており、中心市街地とやきものという新たな交流が生まれていた。

みずなみ陶土フェスタ@美濃  
会場は瑞浪市の河戸町元町ストリートと呼ばれる中心市街地の商店と住宅が混在する通りである。目玉イベントであるクレイオブジェコンテストには全国各地から参加者が集まる。クレイオブジェコンテストジュニア、オカリナ無料絵付け体験などのイベントは高校生のボランティアによって企画運営がされている。注目すべきは、クレイオブジェコン

酔月窯秋祭り@萬古  
窯元が一年に何度か企画しているイベントのひとつ。今まで紹介したものに比べれば規模は小さいものの、窯だしされた新作の展示、陶芸教室参加者の作品展示、呈茶、音楽ライブ、野菜の即売会など催しは多数であった。

郊外にある窯元で開催されていた秋祭りが、すわ公園交流館の要請によって中心市街地内に場所を移して行われたのが一番の特徴である。すわ公園交流館は昭和初期の建物で、二〇〇三年八月に中心市街地活性化の拠点施設になるように改

交流の場「人づくりの場」  
共通している点はまち独自の資源であるやきものを活かしてまつりを開催し、人々の交流を生み出していることである。他のまちとは差別化した「やきものまつり」を行うことで、全国からの注目も得られ多くの人がまちを訪れるようになり、多くの交流を生む場になっている。

## 交流の場「人づくりの場」

そして、「やきものまつり」は人づくりの場でもある。企画や運営に携わった者にはまちづくりのリーダーとしての今後が期待される。また、「やきものまつり」に訪れることによって、まちの住民やそのまちで働く人がそのまちを誇りに思い、愛着を持つようになり、まちやまちづくりに関心を持つことにつながる。

どのように「やきものまつり」とまちが変わっていくのか注目していきながら、今後も「やきものまつり」を訪れていきたいと思う。